MOC OSAKA 大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

2010.1 No.92

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ
開催中～平成22年3月28日（日）

- 国際交流特別展
「北宋汝窯青磁―考古発掘成果展」
- 特集展
「初代宇野宗甕の陶芸」
- 平常展
安宅コレクション中国陶磁・韓国陶磁
李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁
沖正一郎コレクション鼻煙壺

休館日：月曜（1/11、3/22を除く）、1/12（火）、2/12（金）、3/23（火）

青磁梅瓶
高：39.6cm　宝豊清凉寺窯址出土
河南省文物考古研究所

やきものの芸術学 7

どのような陶磁器が鑑賞の対象となるのだろうか。あるいは芸術作品として価値のある陶磁器とはどのような条件を満たしているのだろうか。そもそも、このような問いかけ自体が意味のあることなのだろうか。

一般に、陶磁器については、既に実用的目的を備えているという前提があり、工芸品のひとつとも考えられている。応用芸術とか装飾芸術などと、呼ばれる範疇に入れられることもあり、純粋な芸術作品とは区別されている。

確かに、これまで陶磁器については、実用品の枠組みのなかでとらえられ、それに芸術性が備わっているものについて、鑑賞の対象とみなされたのである。例えば造形作品として美しいと判断される陶磁器をもって、鑑賞の対象にするという行為がある。かつて日用品として作られ、長く伝えられてきた陶磁器のなかから美を見出そうとする立場や、贅をこらした工芸品や皇帝用の磁器に芸術性を探そうとする立場、あるいは出土品の中に造形的な美を発見しようとする立場などがあり、それぞれに多くの作例がある。これらは、もともと鑑賞を目的として作られたのではない古い時代の陶磁器に、美を見出そうとする点においては共通した行為である。

人間が制作する限りにおいて、何らかの制作意図があり、そこに芸術性が認められることはしばしばある。実用品なのか芸術品なのかという議論を全く超越して、作品の「存在」そのものに出会い、そこに芸術性が現象してくるのである。つまり、作品の「存在」に向かい合うことが、作品の芸術性を認識することでもある。陶磁器の表面はあくまでも、造形と釉色、文様などから規定されているが、陶磁器そのものの「存在」を問うとなると、別の感性を働かせねばならなくなる。

作品を言葉で説明しようとするときに、歴史的背景や技法などのほか、造形や釉色、文様などは、定義された言語によって語ることが可能である。しかし、その芸術性のある陶磁器を成立させている本質としての「存在」としか呼べないものについては、果たして語ることができるのであろうか。他のすぐれた芸術作品がそうであるように、すぐれた陶磁器についても、言葉による説明が困難で、その「存在」そのものを直接に感じ取るしかない場合がある。その陶磁器を眼前にして、ただ黙して「存在」を感じとるだけである。

（館長　出川哲朗）

展示室から

開催中～3月28日（日）
国際交流特別展

「北宋汝窯青磁ー考古発掘成果展」

昨年12月5日から国際交流特別展「北宋汝窯青磁ー考古発掘成果展」が始まりました。この展覧会は当館が近年学術交流を行ってきた河南省文物考古研究所の全面的な協力により、宝豊清凉寺汝窯址の主要な出土品約100件を展示するものです。中国国外でのまとまった展示は今回が初めてで、もちろん全て日本初公開です。日本で汝窯の伝世品を有する唯一の美術館である当館が開催するにふさわしい内容であり、世界的にも大きな意義を持つものといえます。清凉寺窯址の発見と発掘は、汝窯の産地を明らかにしたのみならず、伝世品には見られない器形や文様のものなども出土し、従来の汝窯のイメージを大きく変えることになりました。また、窯や工房などの遺構と窯道具などにより汝窯の焼造技術も明らかになりました。展示品はいずれも窯址出土の破片が中心で、ある程度復元されたものもありますが、あくまで発掘品です。しかし、汝窯の謎を解く重要な資料であると同時に、破片や窯道具などにも宮廷用製品を製作した汝窯ならではの美しさが感じられます。従来の汝窯のイメージを新たにする最新の発掘成果をどうぞお楽しみ下さい。（H.K.）

特集展

初代宇野宗甕の陶芸

宇野宗甕（1888-1973）は、京都五条坂の陶芸家宇野仁松（1864-1935）の長男として生まれました。早くから家業を担っていた宗甕は、中国古陶磁の美しさに強く心を打たれたことをきっかけに、青磁釉や鈞窯釉、天目釉などの色釉の再現を自らの使命とすることを決意します。明治から大正、昭和という時代の変化の中で多くの陶芸家が作家としての個性を模索していく中、宗甕は自らを「陶工」とも称し、あくまでも中国古陶磁の釉薬研究とその再現にこだわり続けました。この長い研究の成果によって、のちの昭和32年（1957）には文化財保護委員会より「辰砂」「青磁」の技術が無形文化財として選択されることになりました。また晩年に制作された「水青磁」や「茜映し」といった独自の釉薬技法による作品は宗甕の作品制作に新たな魅力を加えています。

本展では、宇野眞理栄氏よりご寄贈いただいた作品全87点の中から約30点を展示し、初代宇野宗甕が生涯をかけた中国古陶磁の釉薬研究に対する確かな足跡をご紹介いたします。（T.H.）

写真上：青磁鴛鴦形香炉蓋　高15.0cm
宝豊清凉寺窯址出土　河南省文物考古研究所

写真下：鈞青 茜映し花生
初代宇野宗甕作　昭和48（1973）年　高30.3cm
Acc.No.34073（宇野眞理栄氏寄贈）

次回展示予定：
平成22年4月10日（土）～7月25日（日）
企画展「高麗の水注」（仮称）
特集展「中国陶磁の美」（仮称）

編集後記

- 平成21年11月17日、天皇、皇后のご視察があり、中国・韓国の陶磁器をご覧になられました。
- 現在開催中の国際交流特別展「北宋汝窯青磁ー発掘成果展」の期間中には、1月に韓国陶磁、3月に中国陶磁のシンポジウムをそれぞれに予定しております。また1月には、特集展示「初代宇野宗甕の陶芸」に関する講演会もございますので、同封のチラシをご確認ください。寒い時期ですが、どうぞ、暖かくしてご参加ください。（S.S.）

ボランティアの窓

- 韓国からの日本語のできるお客様がお見えになった時のことです。李コレクションの展示室で、「イ・ビョンチャン・コレクション」と案内し、お客様に「今の発音で合ってますか?」とお聞きしましたら「大丈夫です。合ってますよ」と言って頂き、ホッとー安心。外国の方のお名前ですから、うまく発音できなくても少しでも正しくお伝えしたいものです。そういった気持ちが伝わったのか、温かい眼差しで熱心にご覧頂き、会話も弾みました。（M.K.）

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信　通巻第92号
2010年1月1日発行　No.25-4（年4回）

編集・発行：大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン：清嶋滋+studioTWEN　印刷：岡村印刷工業株式会社

第71回講演会要旨

「浅川伯教と朝鮮伝統工芸について」

山梨英和大学助教　李（イ）尚珍（サンジン）氏

本日は、最初に浅川伯教の生い立ちを紹介し、そして彼が朝鮮に渡り、その国の伝統工芸研究に取り組んでいく過程と、その今日的意義などについてお話します。

浅川伯教は1884年に山梨県北巨摩郡で生まれました。7歳の時に父親が亡くなり、その翌年弟の巧が生まれます。父親を早くに亡くしているので、祖父たちの影響を大きく受けて成長しました。父方の祖父・四友（しゆう）は、地元では有名な学者でした。伯教は20歳の時に甲府教会（メソジスト派）で洗礼を受けます。そして、山梨県師範学校卒業の後、小学校の教員となり美術を教えるかたわら、彫刻家・新海竹太郎に入門して本格的に彫刻を勉強します。1913年に母と一緒に朝鮮に渡り、小学校の教員として京城（現在のソウル）に滞在します。翌年に巧も朝鮮に来ます。1914年9月に、日本に一時帰国をしますが、その目的は三枝たか代との結婚と、白樺派の柳宗悦が預かっていたロダンの彫刻を見るためでした。

柳宗悦は伯教と出会うことによって、朝鮮に強い関心を持つようになります。柳は、さっそく1916年8月に朝鮮旅行に出かけ、伯教の案内で佛国寺などを訪ねます。その3年後の1919年には朝鮮独立運動が興りますが、伯教はその後すぐに教員を辞めます。その後、日本に戻り彫刻に専念して、1920年の帝国展覧会で彫刻「木履（ボックリ）の人」（Fig.1）が入選します。その間は朝鮮にいる妻・たか代が梨花女学校などで教員として働き、生計をたてていたそうです。1922年に再び朝鮮に戻った伯教は、朝鮮陶磁研究に専念します。そして、1924年に柳宗悦と弟の巧との3人の共同活動で朝鮮民族美術館を開館します。1928年には啓明会より朝鮮陶磁研究の補助を受け、本格的に窯跡を調査します。1945年に日本が敗戦し、日本人が引き揚げていくなか、伯教はアメリカ軍から朝鮮陶磁研究を続けてほしいという依頼を受け、1年間の特別在留許可を得るほど研究者として高い評価を受けていました。

伯教の朝鮮行きは、彼が「自由な仕事」を求めていたことが直接的な理由であると、私は考えています。当時の伯教が勤めていた師範学校では、公開授業や研究報告などの規制が多くありました。伯教は一生懸命に授業教育案を作成したり、授業を通して生徒とのコミュニケーションを最優先とする授業方法論を出したり、とくに美術教育における研究の改良の必要性を主張していました。しかし、同僚たちの無関心や偏見などがあり、「自由な仕事」を求めるようになったのだと思います。そして、『山梨教育』（Fig.2,3）の会員でもあった伯教は、それに掲載されている朝鮮に関する論文も読んでいて、 朝鮮に関する知識はそこから得ていたのではないかと思われます。例えば、1910年9月号には「韓国併合について」という論説が出ています。

伯教の朝鮮伝統工芸研究は、柳宗悦との出会いとその後の交流が大きな動機付けになったと思います。それは、『白樺』1922年9月号の論文（柳宗悦「李朝陶磁器の特質」、浅川伯教「李朝陶器の価値及び変遷に就て」、浅川巧「窯跡めぐりの一日」）と「朝鮮民族美術館」の開館運動によって確認することができます。美術館の設立のための展示作品は、伯教や巧が個人的に持っていた物や、柳と一緒にお金を出し合って集めたものでした。柳は日本にいて、年に何回か朝鮮を訪れるのみで、美術館の管理は伯教と巧の協働によるものでした。

ここで、伯教の研究の特徴について考えてみますと、その一つにフィールド・ワークが挙げられます。啓明会からの補助金3千円で、1929年2月から31年9月までの約3年間に679カ所ほどの窯跡を調査しました。これは、当時の交通手段や道路事情などからみても驚異的な数ではないかと思います。伯教は窯跡を調査するだけではなくて、その場所で作品も作りました。山梨県の「浅川伯教・巧兄弟資料館」にはそれらの作品が数点展示されています。伯教は文章を書かない人で有名だったようですが、フィールド・ワークの成果については複数の論文を残しました。例えば、著書『釜山窯と対州窯』（彩壺会、1930年）と『朝鮮陶器の観賞』（彩壺会、1935年）、論文「朝鮮現在の窯業」（『世界陶磁全集第16巻』河出書房、1958年）などがあり、その中には朝鮮の素晴らしい伝統工芸の将来を心配する文章も残しています。

伯教の研究のもう一つの特徴は、朝鮮人町に住み、朝鮮の人たちと交流しながら、朝鮮伝統の美を認識していったことです。その日常生活とフィールド・ワークを通して、朝鮮伝統工芸の構成要素としての「自然」と「ひと」と「もの」の「調和の美」を認識しました。そして、工芸品を「作るひと」と「使うひと」として人にも注目しました。それは、伯教の作品からも確認できます。例えば,第5回朝鮮美術展覧会（1926年7月）の入選作品「壺と小供」（Fig.4）には、壺と子供が描かれていますが、人なのか陶磁器なのかわからないほど同じ曲線を使って、物と人間を表現しています。ここに「ひと」と「もの」、「作るひと」と「使うひと」の「調和」そのものを表している伯教の思いが伺えます。また伯教は、朝鮮人が白色を好み、白色を見分ける力が卓越していることに気づいて、書き残しています。

さらに、伯教は朝鮮伝統工芸の様々な要素における「伝統継承の美」に注目しました。「朝鮮の人は佳いものを一度握れば決して其味を失はぬ様に、何回でも創作の心を失はずにやって行き、伝統を重んじ、古い型を最もよく残している」（「李朝陶器の価値及び変遷に就て」pp.4～5）と評価しています。当時の朝鮮では、手で物を作る人に対する評価が非常に低く、自分の子供に継がせるということをあまり好みませんでした。しかし伯教は朝鮮人が自分たちの伝統を生かすことによって、世界に朝鮮の立場をはっきりとしなければならない、そして素晴らしい工芸品によって、朝鮮を世界に知らしめることができると強調したのです。

さらに伯教は、将来の朝鮮伝統工芸研究は、朝鮮の若い人たちによって行われるべきであるとし、朝鮮人自身によって朝鮮の未来を開拓することを強く願っていました。そして、伯教の傍らには朝鮮の少年・池順鐸（ジ・スンテク、1912～1993）がいました。後に韓国で重要無形文化財保有者（人間国宝）に指定された陶芸家で、青磁の制作を復元された方です。伯教家の近くに住み、伯教と一緒に窯跡をめぐることからはじめたようです。もう一人は柳海剛（ユ・ヘカン、1894～1993）という陶芸家がいますが、現在韓国の利川市に海剛陶磁美術館が設立され、2代目の柳光烈館長が陶磁器の研究と教育に専念しています。

伯教と巧は朝鮮伝統工芸研究に大きな業績を残しましたが、広く知られるようになったきっかけは、韓国人・金成鎭（キム・ソンジン、1910～1992）によるものでした。日本が敗戦した1945年9月中旬、京城の町は日本の植民統治からの解放の感激から未だ冷めきらぬ韓国人と戦勝国米国の進駐軍、敗戦の衝撃に打ちのめされた日本人たちが本国引き揚げを急ぐあわただしさ、これらが一体となったざわめきが巷に湧きかえっていました。そうしたある日、金成鎭氏は骨董屋で品のある白髪の老紳士に出会いました。それが伯教でした。伯教は、金成鎭氏が古陶磁など朝鮮伝統工芸品の収集に夢中になっていることを知って、自分の収集品の壺を譲り、さらに弟・巧の日記を預けました。その日記は、現在山梨県北杜市高根町の資料館にあります。金成鎭氏は朝鮮戦争の最中でも、この日記を失ってはいけないと、避難先では枕にして身から離さず誰にも触らせなかったほど大切にしていました。その日記を、彼は1996年2月に高根町に寄贈しました。

伯教が金成鎭氏に巧の日記を預けて帰国したのが1946年11月3日です。知人宅で2年間世話になり、1949年に千葉県に移りました。そして、日本でも陶磁器研究を続け、講演や原稿執筆活動なども続けました。その時期の代表的な著書には『李朝の陶磁』（赤星五郎発行、座右宝刊行会、1956年）があります。伯教は1946年に日本に帰国する際にアメリカ軍から「収集品を好きなだけ持って行きなさい」といわれたそうです。その時どのくらい持って帰ったのかまだ詳しくはわかりませんが、重要な収集品は韓国に残したため、現在、韓国国立中央博物館に保管されています。それらは「接収品」として処理された朝鮮民族美術館の旧蔵品2,904点で、そのうち完成品の陶磁器が2,272点です。陶片の接収品の数は現在調査中だそうです。

伯教は、1964年1月14日に亡くなりました。『民藝』の追悼号（1964年3月号）に、濱田庄司や河井寛次郎などの多くの人が回想文を書いています。そのなかで安倍能成が、伯教は「親しく朝鮮人と交はり、朝鮮人の中に生活した為に、（中略）短所と共に長所を見出し、愛情を抱いていた」（「浅川伯教君のこと」p.12）と書いています。伯教は、朝鮮・朝鮮人の良い所だけ見ていたのではありません。短所も長所もよく見て、愛情を持ったのです。そして、朝鮮人街の真中に住んで朝鮮人と同じ生活をして、自分がまったく朝鮮人になりきったような気持ちで暮らしていたのです。終戦後も京城に居住し、日本に帰ろうと思っても朝鮮の人たちに引きとめられて、なかなか帰れなかったそうです。伯教自身もこう書いています。「私の尻が重いので、皆はらはらして別れの挨拶に来てくれたので、日に日に寂しくなる。（中略）朝鮮の人々が（中略）時々、塀の穴から漬物や野菜等を入れてくれる」（『李朝の陶磁』p.2）。韓国の人は恥ずかしがり屋なのでしょうか。でも伯教のことが心配で、家にお米を持ってきてくれる人、どぶろくを届けてくれる人もいました。春になって居住許可書が出て、町を歩けるようになり、朝鮮の友達も訪ねて身辺を心配してくれたということです。

最後に、伯教の朝鮮伝統工芸研究が持つ意義について考えてみます。白磁や工芸品を美術品・芸術品として評価して、それを残そう、関連記録を残そう、それを研究史料として残そうという伯教の思いは強かったと思います。その思いは今の陶芸家や研究者たちにも影響を与えています。さらに、単なる植民地統治の被支配側の朝鮮ではなく、そこに生まれて暮らしている「ひと」をきちんと認識したという、日本人のもう一つの朝鮮観を見出すこともできるのではないでしょうか。

2004年9月に、韓国陶磁研究の権威者の鄭良謨（ジョン・ヤンモ）先生に取材することができましたが、その時に一冊の伯教の著書『李朝の陶磁』を出されていろいろ説明をしてくださったり、伯教の収集品がどれだけ評価できるものかということを非常に詳しく説明してくださいました。

1996年に浅川巧の日記が寄贈されたことにより、地元の山梨県に偲ぶ会が結成され、2001年には「浅川伯教・巧兄弟資料館」（Fig.5）が設立されました。そこには、浅川兄弟ゆかりの壺を韓国人陶芸家が再現し、資料館に寄贈されたものも展示されています。このように、浅川兄弟をめぐる両国の交流は続いています。

私は山梨英和大学の教員ですが、大学には最近中国や韓国からの留学生が多く来ます。新入学の留学生と一緒に浅川兄弟の資料館を見学したことがあります。韓国の留学生はもちろん、中国の留学生たちも、浅川兄弟のことを知って、自分も「中日友好交流に全力を尽くしたい」、「ここにきて感動した」、そして「中日関係の架け橋になりたい」と感想を書いてくれました。これは普遍的な「ひと」の気持ちで、国や言葉が違っても思いは同じであるということを改めて実感しました。

2005年に津田塾大学の高崎宗司先生と山梨英和中学・高校の深沢美恵子元教員と一緒に『回想の浅川兄弟』（草風館）（Fig.6）を発行しました。その回想文の一つに、伯教の長女の牧栄さんが書いたものがあります。「父にしても叔父にしても朝鮮の家に入って朝鮮の服を着て朝鮮語を話していましたから、それが当然だと思い、また家の中、あちらこちらに陶器が置いてあり、家にいる時はいつも朝鮮紙に壺の絵ばかり描いていた」。親のことを子供たちはしっかり見ていたわけです。牧栄さんが父親・伯教の日常的な姿から学んだように、日韓相互理解において、互いの身近なことへの関心に学ぶべきことが多いと思われます。みなさんはどのように思われますか?

Fig.1 「木履の人」
第2回帝国美術院展覧会、1920年

Fig.2 『山梨教育』表紙

Fig.3 『山梨教育』のなかで伯教の名前が書かれた論文

Fig.4 「壺と子供」
第５回朝鮮美術展覧会、1926年

Fig.5 浅川兄弟資料館（館内）

Fig.6 『回想の浅川兄弟』
（草風館　2005年）

プロフィール

李　尚珍 氏
1991年に韓国漢陽女子大学を卒業後、1993年に来日。宇都宮大学国際学部卒業後、同大学院国際学研究科（国際学修士）を修了し、2008年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程を修了（人文科学博士）。博士学位論文として「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究―植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として―」を上梓。2008年より山梨英和大学人間文化学部に助教（専任教員）として勤務。